

五七六 霊が人間よりもどのように優秀であるか、だれでも内的に考え、自分の心(mens)の働きについて何らかのことを知る者なら、見て、把握することができません——人間は、半時間のうちに口に出し、文書で表現することができるよりも多くのものを、自分の心で一分間のうちに考え、展開し、結論することができるからです——ここから、人間は自分の霊の中にいる時、したがって霊となるとき、どれほどまさるか明らかです。なぜなら、霊が考えるのであって、身体は霊がその考えを話すかまたは書くことを表現するものであるからです。

ここから、死後、天使となる人間は、世で生きたときの知性と知恵と比較すれば、言葉にできないほどの知性と知恵の中にいます。その霊は、世で生きたとき、身体に結び付けられ、その身体によつて自然界にいたからです。それゆえ、その時、霊的に考えたことが、相対的に、全般的で、粗雑で、あいまいなものである自然的な観念に流入しますが、霊的な思考のものである無数のものを、その観念は受け入れられないで、世で心配事からのものである暗いもので包む込んでしまします。

霊が身体から解放され、自分自身の霊の状態の中にやつて来るときは異なります。そのことは、自然界から彼自身の霊界へ移るとき、起こります。

その時、思考と情愛に関して、その状態は以前の状態と比べて計り知れないほどまさり、その者は、「それで、明らかである」と言うでしょう。

ここから、天使は言葉にできず、表現できないもの、したがって、自然的な人間の思考の中に入ることができないようなものを考えています。それでも、それぞれの天使は人間に生まれ、人間として生き、そしてその時、自分自身が他の同じ人間よりも賢いことを見ていませんでした。

五七七 天使のもとに知恵と知性があるのと同じ程度に、地獄の霊のもとにもそれだけ悪意と欺きがあります——身体から解放される時、人間の霊は自分自身の善の中または悪の中にいるので、事情は似ているからです。天使の霊は自分の善の中に、地獄の霊は自分の悪の中にいます。なぜなら、しばしば以前に言われ、示されたように、それぞれの霊は自分自身の愛であるので、自分自身の善かあるいは自分自身の悪であるからです。

それゆえ、天使の霊が自分の善から考え、意志し、話し、行動するように、地獄の霊も自分の悪からそのようにします。悪そのものから考え、意志し、話し、行動することは、悪の中にあるすべてのものからそうするので。

「2」身体の中に生きたときは異なります。その時、人間の霊の悪は、それぞれの人間にある法律・利益・名誉・名声からの束縛の中に、またそれらを失う恐れから束縛の中にいました。それゆえ、その霊の悪は、その時、突発して、本質的にどのようなものであるか明らかにすることができません——さらにまた、その時、人間の霊の悪は、外面的な正直・誠実・公正、それと真理と善への情愛で、まわりをおおわれ、包まれて横たわっていて、人間が世のためにそのように口先で装い、ふりをし、それらの下に、このように秘められ、やみの中に隠れられています。自分の霊の中にこれほどの悪意と欺きがあること、したがって自分の中に、悪魔がいることを彼自身がほとんど知らないほどです。死後、彼の霊が自分自身の中に、自分自身の性

質にやって来るとき、そのような性質の悪魔になります。

「3」その時、まったく信じられないような悪意が明らかにされます。

悪そのものから数千もの悪意がその時、突発します。それらの中にはまた、何らかの言語による言葉で表現することができないようなものもあります。どのようなものであるか、多くの経験によつて私に知り、知覚することが与えられました。私は、主により、靈に関して靈界に、同時に身体に関して自然界にいるようになったからです。

私は以下のことを証言することができます。彼らの悪意はほとんど数千のうちの一つすら述べることできないほどのものであること——もし主が人間を守られないなら、どんな場合でも地獄から解放されることはできないこと、なぜなら、人間のそれぞれの者のもとには、天界からの天使がいるのと同じく地獄からの靈もまたいるからです(前の二九二、二九三参照)。もし人間が神性を認めないなら、もし信仰と仁愛の生活を生きないなら、主は人間を守ることができないこと、なぜなら、そうしなければ、主から自分自身を背け、地獄の靈へ向かい、こうして自分の靈に関して同じような悪意に浸されるからです——

「4」それでも人間は、靈との交わりから自分自身に適用し、あたかも引き寄せているような悪から、絶えず主により導き出されています。もし、良心である内なる束縛によつてでないなら——神性を否定するなら良心は受け入れられません——やはりそれでも前に言われたような外なる束縛によつてです。それらの束縛とは、法律とその罰の恐れ、そして利益を失い、名誉や名声を奪われることの恐れです。

確かに、このような人間は、自分の愛の快きによつて、またそれらを失うことと奪われることの恐れによつて、悪から導き出されることができます。しかし、靈的な善の中に引き寄せられることはできません。なぜなら、

これらの〔靈的な善の〕中に引き寄せられれば引き寄せられるほど、それだけ、彼自身のもとで、説得し、こうしてだまそうとする目的で、善・誠実・公正を装い、偽つて、策略や欺きを考えるからです。この欺くことは、彼の靈の悪を増し加え、悪を形成し、そして自分の性質の中にあるような悪にしてしまいます。

五七八 自己愛からの悪の中にいた者、また同時に自分の内部で欺きから行動した者は、すべての者のうちで最悪です。欺きが思考と意図の深くに入り、それらを毒で害い、こうして人間の靈的ないのちのすべてを破壊するからです。

彼らの大部分は、地獄の中の後ろにいて、悪鬼と呼ばれます。そしてその彼らの快きは、自分自身を目立たせないようにして、他の者のまわりを幽霊のように飛び回り、ひそかに悪を加えることであり、悪をマムシの毒のようにまき散らしています——彼らは他の者よりもひどく苦しめられます。

狡猾ではなく、悪意ある欺きにとられもしなかつたけれども、それでも自己愛からの悪の中にいた者もまた、地獄の中の後ろにいますが、それほど深いところではありません。

けれども、世俗愛から悪の中にいた者は地獄の中の前方にいて、〔悪〕靈と呼ばれます——この者は、自己愛からの悪の中にいる者のような悪の中にいません、すなわち、そのような憎しみと復讐の中にはいません、したがって彼らにそのような悪意や欺きはありません。それゆえ、彼らの地獄もまた、穏やかなものです。

五七九 悪鬼と呼ばれる者にどのような悪意があるか、経験によつて知るようになりました。

悪鬼は、思考でなく、情愛に働きかけ、流入します——獣を森の中で犬のようにかぎ出し、情愛を把握し

ます。善良な情愛を把握すると、不思議にも本人の快きによってそれらを導き、そらせて、たちまち悪へと変えます。そしてこのことを、他の者が何も気づかないように、このようにひそかに、何かが思考の中に入り、こうして明らかにされることのないように巧みに用心して、このように悪質な技巧で行ないます。

人間のもとでは、後頭部の下に居座っています。

これらの者は、世では他の者の情愛の快さまたは欲望によってその心(anims)を導き、説きつけ、欺いてその心をつらえた人間でした。

しかし、彼らは主により、何らかの改心の望みがあるすべての人間への接触を妨げられています。彼らは人間のもとで良心を破壊するだけでなく、その遺伝悪をかきたてることができるような者であるからです。かきたてられなければ、その遺伝悪は深く隠されています——それゆえ、人間がその悪の中へ導き入れられないように、主はこの地獄が完全に閉ざされているよう配慮されています。それで、死後、このような性質の人間が来世にやってくる時、彼は直ちに彼らの地獄に投げ入れられます。

さらにまた、欺きと策略について眺められるとき、彼らはマムシのように見えます。

五八〇 地獄の靈にはどのような悪意があるか、その極悪な技巧から明らかにすることができません。その技巧は、それらを列挙するだけで一冊の本を、それらを記述するなら数多くの本を満たすほど多くのものがあります。

それらの技巧のほとんどすべてのものは世で知られていません。

第一の種類は、対応の濫用に関係します。

第二のものは、神的な秩序の最後のものの濫用に関係します。

第三のものは、向きを変えることや眺めることよって、また自分自身でなく他の靈によつて、また自分自身から送り出すことよつて、思考や情愛の伝達や流入に関係します。

第四のものは、幻想による作用に関係します。

第五のものは、自分自身の外へ投げ出し、そのことから、身体のある以外の他の場所に居合わせることに関係します。

第六のものは、見せかけ・間違つた信念・うそに関係します。

悪人の靈は、自分の身体から解放されるとき、自分自身から、これらの技巧の中へとやつて来ます。その時、彼の悪い性質に内在していたものの中にいることになるからです。

これらの技巧によつて地獄の中で互いに苦しめ合っています。

しかし、見せかけ・間違つた信念・うそによつて生じるものを除いて、これらすべての技巧は世で知られていません、私はそれらのものを特定してここで述べたくありません、理解されないし、極悪なものであるからです。

五八一 拷問が地獄の中で主により許されている理由は、そうでなければ、悪は抑制され、服従されることができないからです。

悪を抑制し、服従させ、地獄の集団を束縛の中に保つ唯一の手段は、罰への恐れです。他の手段は存在しません。なぜなら、罰と拷問への恐れがないなら、悪は狂暴へと突進し、法律や罰のない地上の王国のように、すべてのものは追い散らされるからです。

61 地獄の外観、位置、数の多いこと

五八二 霊界に、すなわち、そこに霊と天使がいる世界の中に、自然界と、すなわち、人間がいる世界のものと同様なものが見られます。外なる見かけでは何も相違がないほどに似ています。

そこには平野が見え、山・丘・岩、そしてそれらの間に谷が見えます。ほかにも水、地上にあるような他の多くのものが見えます。

しかしそれでも、それらのすべてのものは霊的な起源から存在しています。それゆえ、霊と天使の目の前に見え、人間は自然界の中にいるので人間の目の前には見えません。霊的なものは霊的な起源から存在するものを見、自然的なものとは自然的な起源から見ます。

それゆえ、人間は、霊の中にいることが与えられないなら、また死後、霊になるときでないなら、霊界の中にあるものを決して自分の目で見ることはできません——逆に、天使と霊もまた、自分たちと話すことが与えられている人間のもとにいないなら、自然界のものをもまったく見ることができません。人間の目は自然界の光を受け入れるのに適し、天使と霊の目は霊界の光の受け入れるのに適しているからです。それでもその両方の目は外観では完全に似ています。

霊界がこのようなものであることを、自然的な人間は把握することができません。まして、自分の身体の中で見るもの、自分の手で触れるものしか信じず、よって、視覚と触覚を通して取り入れられます——それらから考えます。それゆえ、その思考が物質的であって、霊的でない感覚的な人間は決してできません。

このような類似が霊界と自然界にあるので、それゆえ、人間は、死後、同じ世界の中にいて、そこに生まれ、

そこから出てきたとしか思いません。その理由からもまた、「死は、ある世界から似たような別の世界への単なる移動」と呼ばれています（このような類似が両方の世界にあることは前に「天界の中で表象するものと外観」について扱われているところ一七〇〜一七六番参照）。

五八三 霊界の高いところに天界があり、その低いところに霊たちの世界があり、それらの下に地獄があります。

天界は、霊たちの世界にいる霊に、彼らの内的な視覚が開かれていないなら見られません——それでも、ときどき、薄霧のようにまたは白く輝く雲のように見えます。その理由は、天界の天使は知性と知恵に関して内的な状態の中にいるからであり、このように霊たちの世界にいる者の上方に見られます。

けれども、平野や谷にいる霊は、お互いに見えています。しかしながら、そこに分離があるとき、そのことは自分自身の内的なものの中に入れられるとき起こりますが、その時、悪い霊は善い霊を見ません。けれども、善い霊は悪い霊を見ることができません、しかし、彼らから身を背けます。そして、背く霊は目に見えなくなりません。

けれども、地獄は閉ざされているので見えません。門と呼ばれる入り口だけが、似た者を入れるために開かれるとき見えます。

すべての地獄への門は霊たちの世界から開かれていて、天界から開かれている門はありません。

五八四 地獄は、山や丘や岩の下にも、平野や谷の下にも、どこにでもあります。

山や丘や岩の下にある地獄への開き口または門は、目には岩の隙間や割れ目のように見え、あるものは幅が広くて大きく、あるものは狭くて細く、その大多数はゴツゴツしています。そのすべては、覗き込むと、暗く、黒ずんで見えます——しかし、その中の地獄の霊は、石炭の火からのような明るさの中にいます。彼らの目はその明るさを受け入れるのに適しています。このこと理由は、世の中で生きた時、神的真理に関して、それを否定して暗黒の中に、また虚偽に関して、それを肯定していわばその光の中にいたからです。そこから彼らの目の視覚はこのように形作られます——ここからもまた、天界の光は彼らにとつて暗黒です。それゆえ、自分の洞穴から出るとき、何も見えません。

これらのことから、人間は神性を認め、天界と教会のものを自分自身のもとに確信すればするほど、それだけ天界の光の中に入って来ること——神性を否定し、天界と教会のものに対立するものを自分自身のもとに確信すればするほど、それだけ地獄の暗黒の中に入って来ることが極めて明らかです。

五八五 平野や谷の下にある地獄への開き口または門は、いろいろな種類の外観を見せています——あるものは、山や丘や岩の下にあるものに似ています。あるものは洞穴やほら穴のようであり、あるものは大きな裂け目や沼地、あるものは湿地、あるものは水たまりのようです。

そのすべてはおおい隠されていて、悪い霊が霊たちの世界から投げ込まれるときでないなら、開かれませんが——そして開かれるとき、火事するとき空中に見られるような、煙とともに火のようなものが、あるいは煙のな炎のようなものが、あるいは燃えている炉からのようですが、あるいは霧や濃い雲のようなものが出てきます。

「地獄の霊は、これらのものを見ないし、感じない」と言われました。それらの中にいるとき、自分の空気にいるように、そのように自分のいのちの快きの中にいるからです。このことの理由は、彼らは悪と虚偽の中にいて、その悪と虚偽に対応するからです。すなわち、火は憎しみと復讐に、煙とすはそれらからの虚偽に、炎は自己愛の悪に、そして霧と濃い雲はそこからの虚偽に対応しています。

五八六 さらにまた、地獄を覗き込み、内部がどのようなものであるか見ることが私に与えられました。なぜなら、主が喜ばれるとき、上にいる霊と天使は、おおうもので妨害されることなく、最も低いものにもで視覚を及ぼせ、どのようなものであるか調べることが出来るからです——私にもまた、このようにその中を覗き込むことが与えられました。

外観では、ある地獄は、ゴツゴツした岩山の中の洞窟やほら穴に見え、内部へと伸びて、そこからまた深い所へ斜めあるいは垂直に向かっています。

ある地獄は、外観では、森の中の獣の巢や岩穴に似たものに見えました。

あるものは、鉱山にあるような丸天井の洞穴やあなぐらに似て、それには下方に向かう穴がありました。大多数の地獄は三つの部分からなっています。上のものは、そこにいる者は悪の虚偽の中なので、内部が暗黒に見えます。けれども、下のものは、そこにいる者は悪そのものの中なので、火のかたまりに見えます。なぜなら、暗黒は悪の虚偽に、火は悪そのものに対応するからであり、内的に悪から行動した者は地獄のさらに深いところに、けれども、外的に行動した者は、それは悪の虚偽からですが、あまり深くないところにいるからです。

ある地獄は、火事の後の家や都市のがれきのように見え、地獄の霊はそれらの中に住み、隠れています。穏やかな地獄は、粗末な小屋のように見え、路地や街路とともに都市の姿をして隣接しているものもあります。その家々の中の内部には地獄の霊がいて、そこでは、けんか・反目・むち打ち・衣服の引き裂き合いが絶えません。街路や路地では強奪や略奪が行なわれます。

ある地獄は売春宿だけであり、あらゆる種類の汚物と排泄物で満ち、きたならしく見えます。さらにまた暗い森があつて、地獄の霊はその中を獣のように歩きまわります。そこにはまた地下の洞穴があり、他の者から追いかけてられている者はその中へ逃げ込みます。

不毛で砂だらけの荒野もあり、そのあるところには洞穴のあるゴツゴツした岩山があり、あるところには小屋があります——最大の処罰を受けた者は、特に、世で他の者をだます技巧と欺きに努め、考案した者は、地獄からそれらの荒野へ追い出されます。彼らの最後の生活はこのようなものです。

五八七 特定の地獄の位置については、だれも、それどころか、天界の天使も知ることができないで、主だけが知られています。しかし、それらの全般的な位置はそれらの方位から知られます——天界のように、地獄は方位に関して区別され、霊界の中の方位は愛にしたがつて決定されるからです。天界の中のすべての方位は太陽としての主から始まり、それは東です。地獄は天界に対立するので、それらの方位は正反対ものから、したがって西から始まります(これらについては「天界の中の四方位」の章一四一〜一五三番参照)。

「2」[]から、西方の地獄は、すべてのもののうちで最悪な、最も恐るべきものであり、東から遠く離れば離れるほど、段階的、連続的に、それだけ悪く、恐るべきものです。

これらの地獄の中に、世で自己愛の中に、そしてここから他の者への軽蔑の中に、また賛同しなかった者に対する敵意の中に、さらにまた自分たちを崇めず、礼拝しない者に対する憎しみと復讐の中にいた者がいます——その最も遠く離れたところには、いわゆるカトリック教からの者であつて、そこで神々として礼拝されることを望み、ここから人間の靈魂（の救い）や天界での自分たちの権能を認めないすべての者に対して憎しみと復讐を燃やした者がいます。

彼らの気質(animus)は似ています、すなわち、世であつたような自分たちに対立した者に対する憎しみと復讐に似た気質をしています——彼らの最大の快きは残酷に振る舞うことです。しかし、来世でこの快きは彼ら自身へ向けられます。なぜなら、彼らの地獄の中では、互いに自分の神的な権能を取り去る者に対し怒り狂っているからです。西の方向は、それらの地獄で満ちています（これらについて小著『最後の審判と滅ぼされたバビロニア』で多くのことを述べておきました）。

「3」けれども、その方位の中で地獄がどのように配列されているかは、その最も残酷な種類のものは北方に、残酷さの少ないものは南方に向かう側にあることだけしか知ることができません。このように地獄の残酷さは北方から南方へ向かつて、また東に向かつて徐々に減少します——東には、傲慢であり、神性を信じなかつた者がいます。しかしそれでも、西方の深い所にいる者のような憎しみと復讐の中に、欺きの中にはいませんでした。

「4」今日では、東方に地獄はありません。そこにいた者は、西方の前面に移されました。

北方と南方には地獄がたくさんあります——それらの中に、世に生きた時、世俗愛の中に、ここからいろいろな種類の悪の中にいた者がいます。それらの悪は、反目・敵意・盗み・狡猾・貪欲・無慈悲です。最悪

の種類は北方にあり、穏やかなものは南方にあります。その恐るべき性質は、西方に近づくほど、また南方から遠ざかるほど増大し、東方に向かつて、また南方に向かつて減少します。

西方にある地獄の後ろに暗い森があり、その中を悪意のある霊が獣のように歩きまわっています。北方の地獄の後ろも同様です。

けれども、南方の地獄の後ろには荒野があり、そのことについてはすぐ前に扱いました。これらが地獄の位置についてです。

五八八 地獄の数が多いことについて——地獄は、天界の中の天使の社会と同じだけ、それだけ多くあります、天界の社会のそれぞれに地獄の社会が対応するからです。

天界の社会が無数であり、すべては愛・仁愛・信仰の善にしたがつて区別されていることは、「天界はそれらの社会から成る」の章の中に(四一〜五〇番)、また「天界の無辺」の章に(四一〜四二〇番)述べておきました。

「2」それで、善に対立する悪にしたがつて区別されている地獄の社会も同様です。

それぞれの悪には、それぞれの善のように、無限の多様性があります。

このようであることは、それぞれの悪である軽蔑・反目・憎しみ・復讐、欺き、また他の同様なものについて単純な観念しかもたない者にはわかりません——しかし、それらの悪のそれぞれにはこのように多くの特殊な相違が含まれ、また再びこのように多くの特殊な個々の相違が含まれ、それらを列挙するなら一冊の本では足りないことを知らなければなりません。

地獄は、それぞれの悪の違いしたがって整えられ、区別されており、このように整えられ、区別されるものは何もないほどです。

ここから、全般的、特定の、個別的に、地獄は悪の相違にしたがって、あるものは他のものに近くに、あるものは他のものから離れて、無数であることを明らかにすることができません。

〔3〕地獄の下にもまた地獄があります——ある地獄の伝達手段は通行によつて、多くの地獄の伝達手段は発散物によつていて、このことは他の種類の悪との親族関係に完全にしたがつています。

私は、地獄が、すべての山・丘・岩の下に、そしてまたすべての平野や谷の下にあり、それらの下で長く、広く、深く広がることから、地獄の数がどれほど大きいものか知るようになりました。一言でいえば、天界全体そして霊たちの世界全体は、あたかも、それらの下に連続して地獄が掘り出されるようなものです。これらが地獄の数が多きことについてです。

62 天界と地獄の間の均衡

五八九 何らかのものが存在するために、すべてのものの均衡がなくてはなりません。均衡なしに、活動と反動はありません。なぜなら、均衡は一つが働きかけ、もう一つが反応する二つの力の間にあるからです——等しい作用と反作用からの静止が均衡と呼ばれます。

自然界の中ですべてと個々のものの中にもまた均衡があります。一般的な形では、大気そのものの中にあり、その上のものが作用し、圧するかぎり、その下のもものは反作用し、抵抗します。

自然界の中では、熱と冷たさ、光と陰、乾燥と湿気の間にもまた均衡があります。加減された中間の状態が均衡です。

世の三つの界、すなわち、鉱物界・植物界・動物界のすべての対象の中にもまた均衡があります。なぜなら、それらの中に均衡がなければ、何も存在し、存続しないからです。一つの側から働きかけ、もう一つの側から反応している努力(コナトゥス)のように、どこでも存在します。

〔2〕すべての存在あるいはすべての結果は均衡の中で生じます、すなわち、一方の力が働きかけ、もう一方が働きかけられるままにすること、あるいは働きかける一方の力が流入し、もう一方が受け入れ、適当に譲ることによつて生じます。

自然界の中で、働きかけることと反応することは、力または努力(コナトゥス)と呼ばれます。しかし、霊界では、働きかけることと反応することは、いのち(生活)と意志と呼ばれます。そのいのち(生活)は生きていく力、意志は生きていくコナトゥスであり、均衡そのものは自由と呼ばれます。

そこで、霊的な均衡、すなわち、自由は、一方の側から働く善ともう一方の側から反応する悪の間に、または一方の側から働きかける悪ともう一方の側から反応する善との間に存在し、存続します——

「3」働きかける善と反応する悪の間の均衡は善い者のもとにあります、しかし、働きかける悪と反応する善の間の均衡は悪い者のもとにあります。

霊的な均衡が善と悪の間にあることは、人間の生活のすべては善と悪に、そして意志が容器であることに関係するからです。

均衡は真理と虚偽の間にもあります。しかし、このことは善と悪の間の均衡によります。

真理と虚偽の間の均衡は光と陰の間の均衡のようであり、植物界の対象は光と陰の中に熱と冷たさだけでなく存在するかによって、それだけ働きかけられています——光と陰自体は何も働きかけません、しかし、それらを通して熱が働きかけることは、冬の時と春の時の同じ光と陰から明らかにすることができません。

真理と虚偽を光と陰と比べたのは対応からです。なぜなら、真理は光に、虚偽は陰に、熱は愛からの善に対応するからです。そしてまた、霊的な光は真理であり、霊的な陰は虚偽であり、霊的な熱は愛からの善です（このことについては「天界の光と熱が扱われている章二二六〜二四〇番参照」。

五九〇 天界と地獄の間に絶え間のない均衡があります。

地獄から悪を行なおうとするコナトウスが絶えず発散し、上昇しており、天界から善を行なおうとするコナトウスが絶えず発散し、下降しています。

天界の間と地獄の間の中間にある霊たちの世界がその均衡の中にあることは、前に述べました(四二二〜四三三番)。

霊たちの世界がその均衡の中にあるのは、すべての人間は、死後、最初に霊たちの世界に入り、そこで世の中でいたのと似た状態の中に保たれるためです、そこに最高の均衡が存在しないなら、そのことは起こりえません。というのは、そこで世でいたような自分の自由のままにされ、そのことによってすべての者はどのようなか調べられるからです。

霊的な均衡とは、(直前の**五八九番**に言われているように)人間と霊のもとでは自由です。

それぞれの者の自由がどんなものであるかは、そこからの情愛と思考の伝達を通して、天界の天使によって知られます。またそのことは、天使的な霊の視覚の前に、霊たちの行く道によって見られます。

善い霊である者は、天界へ向かう道を行います。しかし、悪い霊は地獄へ向かう道を行います。

実際にその世界の中で道が見えます。そのことがまた、みことばの中の「道」が善へ導く真理を、また正反対の意味では悪へ導く虚偽を意味する理由です——ここからまた、みことばの中の「行くこと」、「歩くこと」、「旅立つこと」は生活の前進を意味します*。

私はしばしば、このような道を、そしてまた、その道を情愛とそこからの思考にしたがって、霊が自由に移動し、歩くのを見ることが与えられました。

*1 みことばの中の「旅立つこと」は「行くこと」と同様に生活での前進を意味する(三三三五、四三七五、四五五四、四五五五、四八八二、五四九三、五六〇五、五九九六、八一八一、八三四五、八三九七、八四一七、八四二〇、八五五七番)。

主とともに「行くこと」と「歩くこと」は、霊のないのちを受け入れること、その方とともに生きることである(一〇五六七番)。

「歩くこと」は生きることである(五一九、一七九四、八四一七、八四二〇番)。

五九一 地獄から絶えず悪が発散し、上昇しており、天界から絶えず善が発散し、下降していることは、霊的なスフェアがそれぞれの者を取り囲んでいて、そのスフェアが情愛とここからの思考の生活(いのち)から流れ出て、わき出ているからです。^{*2} またこのような生活(いのち)のスフェアがそれぞれの者から流れ出るので、ここから天界のそれぞれの社会からも流れ出て、地獄のそれぞれの社会からも流れ出ており、結果として、一緒となったすべてのものから、すなわち、全天界と全地獄から流れ出ています。

善が天界から流れ出るのは、そのすべての者は善の中にいるからです。悪が地獄から流れ出るのは、そのすべての者は悪の中にいるからです。

天界からの善はすべて主からです、なぜなら、天界にいるすべての天使たちは自分自身のプロプリウムを押しとどめられ、善そのものである主のプロプリウムの中に保たれるからです。しかし、地獄にいるすべての霊は、自分自身のプロプリウムの中におり、それぞれの者のプロプリウムは悪でしかありません。悪でしかないので、地獄です。^{*3}

これらから、天界の天使が保たれ、地獄の霊が保たれる均衡は、霊たちの世界の均衡のようではないことを明らかにすることができます。

天界の天使の均衡は、どれだけ善の中にいることを欲したか、すなわち、どれだけ世の中で善の中に生きたか、そのようにまた、どれだけ悪を退けたかです——けれども、地獄の霊の均衡は、どれだけ悪の中にいることを欲したか、すなわち、どれだけ世の中で悪の中に生きたか、そのようにまた、どれだけ心(heart)と霊で善と対立したかです。

五九二 主が天界と同じく地獄も支配されないなら、何らかの均衡は存在しません。また均衡がないなら、天界と地獄は存在しません。全世界の中の、すなわち、自然界と同じく霊界の中の、すべてと個々のものは均衡から存続するからです。

そのようであることは、理性的なすべての人間が知覚することができます——一方の側だけに優位を与え、もう一方の側からは何も抵抗がないとしたら、両方とも滅ばないでしょうか？

もし善が悪に対して反応し、その暴動を常に抑制しないなら、霊界の中はこのようなになります。主がご自

*2 霊的なスフェアは、いのちのスフェアであって、それはそれぞれの人間・霊・天使から流れ出、湧き出て、彼らを取り囲む(四四六四、五一七九、七四五四、八六三〇番)。

それは彼らの情愛と思考のいのちから流れ出る(二四八九、四四六四、六二〇六番末尾)。

霊がどのようなものであるかは、隔たつていても彼らのスフェアから知られる(一〇四八、一〇五三、一三二一六、一五〇四番)。

悪からのスフェアは善からのスフェアに対立している(一六九五、一〇一八七、一〇三二二番)。

そのスフェアは天使たちの社会に、善の質と量にしたがって速く広がる(六五九八、六六一三、八〇六三、八七九四、八七九七番)。

また、地獄の社会の中に、悪の質と量にしたがって(八七九四番)。

*3 人間のプロプリウムは悪以外のものではない(二二〇、二二五、七三一、八七四、八七六、九八七、一〇四七、二二〇七、二二〇八、三五一八、三七〇一、三八二二、八四八〇、八五五〇、一〇二八三、一〇二八四、一〇二八六、一〇七三二番)。

人間のプロプリウムは彼のものとの地獄である(六九四、八四八〇番)。

分でこのことを行なわれないなら、天界と地獄とは滅び、このこととともに人類は滅びます——主がご自分でこのことを行なわれないなら、と言ったのは、天使と同じく霊、また人間も、それぞれの者のプロプリウムは悪ではないからです(前の**五九一**番参照)。それゆえ、天使と霊は、地獄から絶えず発散する悪に決して抵抗することができません、すべての者はプロプリウムから地獄へ向かうからです。

これらから、主おひとり为天界と同じく地獄を支配されないなら、決して救いがないことが明らかです。さらに、すべての地獄は一つとして活動します、なぜなら、天界の中で善が連結しているのように、悪は地獄の中で連結しているからです。そして、天界に対し、また天界の中ですべてのものに対して反抗する地獄の中に無数にあるすべてのものに抵抗することは、主ご自身から発出する神性でないなら、できることはありません。

五九三 天界と地獄の間の均衡は、天界に入る者と地獄に入る者の数にしたがって、滅じ、増し、このことは毎日、数千も生じています——このことを知り、認めること、また釣り合いへと調整し、等しくすることとは、天使のだれにもできません、主おひとりがおできになります——なぜなら、主から発出する神性が遍在し、何がどこに傾くか、どこでも見られているからです。天使はただ自分の近くにあるものだけを見ており、自分の社会の中で何が起きているか自分自身ですら気づいていません。

五九四 天界と地獄の中で、そこにあるすべてと個々のものがそれ自体の均衡の中にあるように、どのようにすべてのものが秩序づけられているか、天界と地獄について、前に言われ、示されたことから、ある程度、明らかにすることができません。すなわち、天界のすべての社会は、善とそれらの種類にしたがって、また地獄のすべての社会は悪とそれらの種類にしたがって、最大に秩序づけられ、分けられています。また、天界のそれぞれの社会の下に地獄の社会が対応する反対の位置にあり、その対応する正反対のものから結果として均衡が生じています。それゆえ、主により、天界の社会の下の地獄の社会が優勢とならないように、常に備えられています。また優勢になり始めるなら、いろいろな手段によって抑制され、均衡の正しい関係にされます。これらの手段は多いので、それらからほんのいくつかだけに言及します。

ある手段は、主の強力な現在(臨在)に関係します。あるものは、一つのまたは多くの社会が他の社会とさらに固く伝達し、結合することに、あるものは、あふれる地獄の霊を砂漠の中に投げ出すことに、あるものは、ある地獄から他の地獄へある者を移動させることに、あるものは、地獄の中にいる者を秩序づけることに関係します、そのこともまたいろいろな方法で行なわれます。あるものは、ある地獄を濃くて粗雑なおおうものの下に隠すことに、また、さらに深いところを下げることに関係します。他にもあり、さらにまた、それらの地獄の上の天界の中で行なわれる方法もあります。

これらのことが言われたのは、何らかの方法が知覚されるためです。それは、どこでも善と悪の間に均衡があり、したがって天界と地獄の間に均衡があるようにと、主だけが備えられていることです。なぜなら、このような均衡の上に、天界のすべての者と地上のすべての者の安全が基礎づけられるからです。

五九五 地獄は絶えず天界を襲い、破壊しようと努力していること、また、主は天界にいる者をそのプロプリウムからのものである悪から妨げ、ご自分からのものである善の中に保って、絶えず天界を守られてい

ることを知らなくてはなりません。

しばしば、私は地獄から流れ出ているスフェアを知覚するようになりました。それは、主の神性を、こうして天界を破壊しようとするコナトウスのスフェアそのものでした——さらにまた何度か、地獄から何か泡立つものが知覚されました。それらは浮かび上がり、破壊しようとするコナトウスでした。

けれども、逆に、天界は決して地獄を襲いません。なぜなら、主から発出する神的なスフェアは、すべての者を救おうとする永続するコナトウスであるからです。また、地獄の中にいるすべての者は、悪の中にいて、主の神性に対立し、救われることができないので、それゆえ、地獄の中で、相互に激しくぶつかり合い過ぎないよう、可能であるかぎり、攻撃が支配され、残酷さが抑制されています。そのこともまた、神的な力の無数の手段によつて生じています。

五九六 二つの王国があり、すなわち、天的な王国と霊的な王国があり、天界はそれらに分かれています（それらについて前の二〇〇二八番参照）。

同様に、地獄に二つの王国があり、それらに分かれています。その一つの王国は天的な王国と反対の位置に、もう一つは霊的な王国と反対の位置にあります。

天的な王国と反対の位置にあるものは、西方にあり、そこにいる者は悪鬼と呼ばれます。しかし、霊的な王国と反対の位置にあるものは、北方と南方にあり、そこにいる者は〔悪〕霊と呼ばれます。

天的な王国の中にいる者はすべて、主への愛の中にいて、その王国と反対側の地獄にいる者はすべて、自己愛の中にいます——しかし、霊的な王国の中にいる者はすべて、隣人に対する愛の中にいて、その王国と

反対側の地獄にいる者はすべて、世俗愛の中にいます。

ここから、主への愛は自己愛と、同様に隣人に対する愛は世俗愛と対立していることが明らかです。

主の天的な王国と反対側の地獄から、霊的な王国の中にいる者に向かって何か流れ出ないよう、主により常に備えられています。なぜなら、もしこのことが起こるなら、霊的な王国は滅びるからです。その理由は前に述べました（五七八、五七九番）。

これらは二つの全般的な均衡であり、それらは主により常に固く守られています。

63 人間は天界と地獄の均衡によって自由の中にいる

五九七 前に、天界と地獄の間の均衡について扱われ、その均衡は天界からの善と地獄からの悪の間の均衡であること、したがって霊的な均衡であり、その本質は自由であることを示しました。

霊的な均衡がその本質では自由であることは、善と悪の間の、また真理と虚偽の間の均衡であり、これらは霊的なものであるからです——それゆえ、善または悪を意志し、真理または虚偽を考え、そして他のものよりもあるものを選べることは自由であり、ここで述べるのはそのことについてです。

この自由は主によりそれぞれの人間に与えられており、決して取り去られません。主からのものであるので、その起源から、確かに、人間のものでなく主のものであります。しかしそれでも、人間に、いのちとともに、自分自身のものであるかのように与えられています。このことの理由は、人間が改心し、救われることができるためです。なぜなら、自由なしに、改心と救いはないからです。

だれでも、理性的に熟慮すれば、人間の中に悪くまたは善く、誠実にまたは不誠実に、公正にまたは不正に考える自由が、そしてまた、善く、誠実に、公正に、話し、行動することができ自由があること、しかし、外なるものを抑制の中に保つ霊的で、道徳的で、市民的な法律のために、悪く、不誠実に、不正に、話し、行動することはできないことを知ることができます。

これらのことから、考え、意志する人間の霊が自由の中にあることは明らかです。したがって、話し、行動するものである人間の外なるものは、前述の法律にしたがっていないなら、自由の中にはありません。

五九八 人間は自由がないなら、改心することができません、すべての種類の悪の中に生まれているからです。それでも救われることができるためには、それらの悪は遠ざけられなければなりません——もしそれらの悪を自分自身の中に見て、認め、その後、それらを望まないで、最後には退けないなら、遠ざけられることはできません。その時になって、初めて遠ざけられます。

このことは、人間が悪と同じく善の中にいないなら、行なわれることができません。なぜなら、善から悪を見ることができますが、悪から善を見ることはできないからです。

人間が考えることのできる霊的な善を、彼は幼児期から、みことばを読むことと説教から、そして道徳的で市民的な善を世での生活から学びます。

このことが、なぜ人間が自由の中にいなくてはならないか、その第一の理由です。

「2」もう一つの理由は、愛のものである情愛からなされるものでないなら、何も人間のものとされないことです——他の何らかのものが入ることができませんが、しかし、思考の中へであって、それを超えて意志の中には入りません。人間の意志の中にまで入らないものは、彼のものとなりません。なぜなら、思考はそれ自身のものを記憶から得ます、しかし、意志は生活そのものから得るからです。

意志からでないもの、すなわち、同じものですが、愛のものである情愛からでないものは、何ら自由なものではありません——何であれ、意志するかまたは愛するものを、人間は自由に行なうからです——ここから、人間の自由と、彼の愛のものまたは意志のものである情愛は一つです。そこで、人間が真理と善に働きかけられることができるように、すなわち、それらを愛し、こうしてそれらが彼のプロプリウム(固有のもの)のようになるために、人間に自由があるのです。

「3」一言でいえば、何であれ自由のうちに人間のもとに入るものでなくては、彼の愛にまたは意志に属するものではないので、残りません。人間の愛または意志に属するものでないものは、彼の霊に属するものではありません。というのは、人間の霊のエッセ(存在)は、愛または意志であるからです。

人間は愛するものを意志するので、愛あるいは意志と言われます。

これらが、人間は自由の中になら、改心することのできない理由です(しかし、人間の「自由について」多くのことは、あとの『天界の秘義』から引用した箇所の中に述べてあります)。

五九九 改心するようにとの理由から、人間は自由の中にいます。それゆえ、人間は自分の霊に関して天界と地獄に結合しています。

それぞれの人間のもとに、地獄からの「悪」霊、天界からの天使がいるからです——地獄からの霊によって人間は自分自身の悪の中にいます、けれども、天界からの天使によって主からの善の中にいます——このように、霊的な均衡の中に、すなわち、自由の中にいます。

それぞれの人間に、天界からの天使が、また地獄からの霊が付き添っていることは「人類と天界の結合」の章に述べました(二九一〜三〇二番)。

六〇〇 人間は天界や地獄と直接的に結合しているのではなく、霊たちの世界にいる霊を通して間接的に結合していることを知らなくてはなりません。人間とともにいるこれらの霊は、だれも地獄や天界そのものから直接にやって来ているではありません——人間は、霊たちの世界にいる悪霊を通して地獄と、そこに

いる善霊を通して天界と結合しています。

このようであるので、それゆえ、霊たちの世界は天界と地獄の間の真ん中にあり、そこに均衡そのものがあります。

霊たちの世界が天界と地獄の間の真ん中にあることは、「霊たちの世界について」の章(四二一〜四三二番)に、また、そこに天界と地獄の間の均衡そのものがあることは、直前の章(五八九〜五九六番)に述べました。これらから、今や人間に自由があるのはどこからか、明らかです。

六〇一 さらに、人間に接合している霊について、いくつか述べておきましょう。

ある社会全体が、その社会から送り出された霊によって、他の社会と、そしてまた他の社会のどこにいうともそのうちのある者と伝達をもつことができます。

この霊は、多くの者の「派遣霊」と呼ばれます。

天界や地獄の社会と人間の結合の場合も同様であり、そのことは霊たちの世界から人間に接合している霊によっています(これらについてもまた『天界の秘義』から引用した最後の箇所に述べてあります)。

六〇二 最後に、死後のいのちについて、天界から人間のもとへ流入から存在する生来のものについて述べておくべきでしょう。

世で信仰の善の中に生きた庶民である単純な者がいました——彼らは世にいたときと似た状態にされました。このことは、主が許されるとき、だれにもなされることです。その時に、人間の死後の状態について、

どのような観念をもっていたか示されました。

彼らは、自分たちは世で知的であった者に、「世での生活の後の自分の魂についてどう考えているか」と質問され、「魂が何であるか、知らない」と答えました。

さらに、「死後の自分の状態について何を信じているのか」と質問され、「霊として生きると信じている」と答えました。

その時、「霊についてどのような信念を持っているか」と質問され、「人間である」と答え、「どこからこのことを知っているのか」と質問され、「そうであるから、そうであると知っている」と答えました。

知的であった者は、「このような信仰が単純な者にあつたこと、自分たちには驚いた」と言いました。ここから、天界と結合しているそれぞれの人間に、死後の自分のいのちについて生来のものがあることが明らかです。

この生来のものは、天界からの流入から、すなわち、主により天界を通して、霊たちの世界から人間に接合している霊によるもの以外のもではありません。生来のものは、人間の霊魂についてつくられた原理やいろいろな確信によって考える自由を消滅されなかつた者のもとにあります（このことも述べておくべきでしょう）。その原理や確信とは、「霊魂とは純粋な思考である、あるいは何らかの生氣に満ちた原理である」と言つて、その座を身体の中に捜すことです。そのときそれでも、霊魂は人間のいのち以外のものではなく、霊は人間そのものであり、世で持つてまわつた地的な身体は単なる装備品であつて、人間そのものである霊はそれによつて自然界に適して行動します。

六〇三 この著作の中で、「天界」・「霊たちの世界」・「地獄」について言われたことは、霊的な真理を知る快さの中にならぬ者にとつて不明瞭であつても、その快さの中にある者にとつて明確であり、真理のために真理の情愛の中にある者、すなわち、真理であるゆえに真理を愛する者にとつて最も明らかであるに違いありません——何であれ愛されるものは、光とともに心の観念の中に入ってくるからです。特に、真理が愛されるとき、そうです。すべての真理は光の中にあるからです。

人間の自由、流入、伝達を行なう霊について『天界の秘義』からの抜粋

自由について

人間は愛することを自由に行なうので、すべての自由は愛に属し、情愛に属す(二八七〇、三二五八、八九八七、八九九〇、九五八五、九五九一番)。

自由は愛に属するので、それぞれの者のいのちである(二八七三番)。

自由からのものでないなら、プロプリウム(固有のもの)のように見えるものは何もない(二八八〇番)。

天界の自由と地獄の自由がある(二八七〇、二八七三、二八七四、九五八九、九五九〇番)。

〔2〕天界の自由は天界の愛に属す、すなわち、善と真理への愛に属す(一九四七、二八七〇、二八七二番)。

善と真理への愛は主からのものであるので、自由そのものは主により導かれることである(八九二、九〇五、二八七二、二八八六、二八九〇、二八九二、九〇九六、九五八六、九五八七、九五八九、九五九一番)。

人間は主により再生を通して天界の自由の中へ導かれる(二八七四、二八七五、二八八二、二八九二番)。

再生されることができると、人間に自由があることが必要である(一九三七、一九四七、二八七六、二八八一、三二四五、三二四六、三二五八、四〇三二、八七〇〇番)。

そうでなければ、善と真理への愛が人間に植え付けられることはできず、そして外見上は、人間に自分のものであるようにして自分のものとされることができない(二八七七、二八七九、二八八〇、二八八八番)。

強制の中で生じるものは何も人間に結合されない(二八七五、八七〇〇番)。

もし人間が強制から改心されることができると、すべての者は救われる(二八八一番)。

改心での強制は有害である(四〇三一番)。

自由からのすべての礼拝は礼拝である、けれども、強制からのものはそうではない(一九四七、二八八〇、七三四九、一〇〇九七番)。

悔い改めは自由の状態中でなされなくてはならず、強制の状態の中で生じるものに効果はない(八三九二番)。

強制の状態、それは何か(八三九二番)。

〔3〕人間に善が備えられるようにと、自由から理性的に行動することが与えられている。それゆえ、人間は悪もまた考え、欲する自由の中にいる、そしてまた法律が禁じないかぎり、行なう自由の中にいる(一〇七七七番)。

人間は、改心するために自由の中にいるようにと主により天界と地獄の間に、このように均衡の中に保たれる(五九八二、六四七七、八二〇九、八九八七番)。

自由の中で植え付けられたものは残る、けれども、強制の中で植え付けられたものは残らない(九五八八番)。

それゆえ、だれにも決して自由は取り去られない(二八七六、二八八一番)。

主はだれも強制されない(一九三七、一九四七番)。

自分自身を強制することは自由からである、けれども、強制されることはそうではない(一九三七、一九四七番)。

人間は悪に抵抗するために自分自身を強制しなければならぬ(一九三七、一九四七、七九一四番)。

そしてまた、善を自分自身からのように行なわなければならない、しかしそれでも「善を行なうのは」主からであることを認めなければならない(二八八三、二八九一、二八九二、七九一四番)。

試練の闘いの中で勝利する人間には、その時、人間は「悪に」抵抗することを内的に考えるので、さらに力強い自由があるが、それでもそのようには見えない(一九三七、一九四七、二八八一番)。

〔4〕地獄の自由は、自己愛と世俗愛により、それらの欲望により導かれることである(二八七〇、二八七三番)。

地獄の中にいる者は、他の自由を知らない(二八七一番)。

天界が地獄から遠く隔たつていようように、それだけ天界の自由は地獄の自由から遠く隔たつていよう(二八七三、二八七四番)。

自己愛と世俗愛により導かれることである地獄の自由は、自由ではなく、隷属である(二八八四、二八九〇番)。
隷属は地獄により導かれることであるからである(九五八六、九五八九、九五九一)番)。

流入について

[5]人間が考え、意志するすべてのものは流入する。経験から(九〇四、二八八六、二八八八、四一五一、四三二九、四三三〇、五八四六、五八四八、六一八九、六一九二、六一九四、六一九七、六一九九、六二一三、七二四七、一〇二一九番)。

人間が物事を観察し、考え、分析的に結論することができるのは流入からである(四三一九、四三二〇、五二八八番)。

もし霊界からの流入が人間から取り去られるなら、人間は一瞬も生きることができない。経験から(二八八七、五八四九、五八五四、六三二二番)。

主から流入するのものは、人間の状態にしたがつて、受け入れにしたがつて変化する(二〇六九、五九八六、六四七二、七三三三番)。

主から流入する善は悪い者のもとで悪に、そして真理は虚偽に変化する。経験から(三六四二、四六三二番)。

悪と虚偽が妨害しなければいよほど、それだけ絶えず主から流入している善と真理を受け入れる(二四一一、三二四二、三二四七、五八二八番)。

[6]すべての善は主から、そしてすべての悪は地獄から流入する(九〇四、四一五一番)。

今日、人間はすべてのものが自分自身の中に存在し、自分自身から存在すると信じているが、それでも流入しているのであつて、このことを、すべての善は主から、すべての悪は地獄から存在することを教える教会の教えの事

柄から知らなければならぬ(四二四九、六一九三、六二〇六番)。

しかし、もし人間がその教えの事柄を信じるなら、その時、悪を自分自身に自分のものとしなすし、善も自分自身のものとしなす(六二〇六、六三二四、六三二五番)。

もしすべての善は主から流入し、すべての悪は地獄から流入すると信じるなら、どれほど人間の状態は幸福であるか(六三二五番)。

天界を否定する者、あるいはそれについて何も知らない者は、そこから何らかの流入があることを知らない(四三三二、五六四九、六一九三、六四七九番)。

流入とは何か、比較による説明(六一二八、六一九〇、九四〇七番)。

[7]いのちのすべては、いのちの「最初の源泉」から流入する。ここからであり、そのように主から絶えず流入するからである(三〇〇一、三三二八、三三三七、三三三八、三三四四、三四八四、三六一九、三七四一、三七四三、四三一八、四三二〇、四四一七、四五二四、四八八二、五八四七、五九八六、六三二五、六四六八、六四七〇、六四七九、九二七六、一〇一九六番)。
流入は霊的であつて、物質的ではなく、したがつて流入は霊界から自然界の中へであり、自然界から霊界へではない(三三二九、五二一九、五二五九、五四二七、五四二八、五四七七、六三三二、九二一〇番)。

流入は内なる人を通して外なる人へ、すなわち、霊を通して身体の中へであり、逆ではない。人間の霊は霊界にいて、身体は自然界にあるからである(一七〇二、一七〇七、一九四〇、一九五四、五二一九、五二五九、五七七九、六三三二、九二一〇番)。

内なる人は霊界の中にある、外なる人は自然界の中にある(九七八、一〇二五、三六二八、四四四九、四五二四、六〇五七、六三〇九、九七〇一、九七〇九、一〇二五六、一〇四七二番)。

人間のもとと外なるものから内なるものへの流入があるように見える、それは(感覚の)欺きである(三七二二番)。

人間のもとの理性的なものの中へ、またそれを通して記憶知の中への流入がある、その逆ではない(二四九五、一七〇七、一九四〇番)。

流入の秩序はどんなものか(七七五、八八〇、一〇九六、一四九五、七二七〇番)。

主から直接の流入があり、そしてまた霊界あるいは天界を通して間接の流入がある(六〇六三、六三〇七、六四七二、九六八二、九六八三番)。

主の流入は人間のもとの善の中へ、善を通して真理の中へである、けれども、その逆ではない(五四八二、五六四九、六〇二七、八六八五、八七〇一、一〇一五三番)。

善は主からの流入を受け入れる能力を与える、けれども善のない真理は与えない(八三三二番)。

思考の中に流入するものは何も害さないが、意志の中に流入するものは、人間に自分のものとされるので、害する(六三〇八番)。

〔8〕全般的な流入が存在する(五八五〇番)。

それは秩序にしたがって活動する絶え間のない努力(コナトウス)である(六二二一番)。

動物のいのちの中へその流入がある(五八五〇番)。

そしてまた植物界の対象物の中へある(三六四八番)。

さらにまた全般的な流入にしたがって、人間のもとの思考は話し方の中へ、意志は行動と振る舞いの中に落ち込む(五八六二、五九九〇、六一九二、六一二一番)。

派遣霊について

〔9〕霊たちの社会から他の社会へ、このように他の霊へ送り出される霊は、派遣霊と言われる(四四〇三、五八五六番)。

来世での伝達は、このような送り出される霊によって行なわれる(四四〇三、五八五六、五九八三番)。

派遣霊として送り出されて仕える霊は、自分自身から考えないで、送り出す者から考える(五九八五、五九八七番)。

これらの霊について多くのこと(五九八八、五九八九番)。

〔『天界と地獄』おわり〕

スウェーデンボリは、スウェーデンの司教イエスパー・スヴェドベリ〔父〕と鉱山の所有者の一族出身のサラ・ベーム〔母〕の息子でした。ウプサラ大学で学んだ後、スウェーデンボリはヨーロッパを広く旅行することですらに学び続けました。その多くの時をロンドンで過ごし、グリニッジ天文台のフラムステイード〔同天文台の初代台長〕を訪れたこともあります。

彼はウプサラ大学の天文学と数学の教授職を提示されましたが、それよりもスウェーデン「鉱山局」での職〔臨時監査官〕を選びました。このほうが国にさらに大きな貢献ができると思ったからです。彼はまた貴族院の議席も与えられています。

彼はスウェーデンの鉱山工業が遅れていると知り、多年にわたりこれを最新のものにしようと励みました。こうする中で、彼は科学と工業の多くの分野を学び、当時、利用できる多くの技術をすばやく吸収しています。自分自身で出版し始めて、彼の『原理論(Principia)』また『鉄』や『銅』についての論文は、広い範囲で尊重されるようになりました。

四十、五十代からはその徹底的な研究を哲学や心理学へ広げています。

彼は靈魂の座を見つけ出すことに関心を持ち続けましたが、しかしついに、科学によってでは自分の探し求める答えは与えられないであろうと悟りました。

彼はヘブル語と聖書を学ぼうと感じ、いろいろな様式で「創世記」についての注解を書いています。

同じ頃、夢の意味に気づき始め、その後、霊的な経験をもちました。

それらの経験により霊的に目覚めた異常な状態へ導かれますが、彼はこれを神の許しであったと主張しています。彼は、ある種の恒常的な「臨死体験」ともいえるものによって、「来世」を二十年間以上にわたって経験することを許されました。

「聖書」を読んでいる間に、彼はその中にある象徴的な意味に気づかされています。彼は科学的な研究をしたときのように、それを経験したものとしてすべてを記録し、ここからの成果として『天界の秘義』、『天界と地獄』といった、また彼が「天使的な知恵」と呼んだ『神の愛と知恵』、『結婚愛』といった数多い神学著作を得ています。

これらの著作は当時の学術的交流のための標準的な言語であるラテン語で書かれました。そのころ自由に出版できる国はオランダとイギリスだけでした。それでそれらの著作は最初にそこ（アムステルダムとロンドン）で出版されています。

八十四歳のときロンドンで亡くなりました。

（この略歴はスウェーデンボリ協会の機関誌『聞き、見たこと』に掲載されています）

あとがき

一七四九〜五六年、スヴェーデンボリは最初の神学著作『天界の秘義』を毎年一卷ずつ八年間連続で出版した二年後の一七五八年に、ロンドンで五つの著作を出版しました(著者七十歳)。

それらは『天界と地獄』(De Coelo et ejus mirabilibus, et de Inferno, ex auditis et visis)『天界とその驚くべきことについて、また地獄について、聞いたことと見たことから』)『新しいエルサレムとその天界の教え』『最後の審判』『白い馬』それと『宇宙間の諸地球』です。

これらの著作は、大作『天界の秘義』の中の「驚くべきこと」から集めた題材を一つの主題に編集したものであり、どの著作にも『天界の秘義』の参照箇所が付いています。特に本書『天界と地獄』では分量がきわめて多くて、ある意味で「驚くべきこと」の「索引」といえるものとなっています。

ラテン語で書かれた本書は二十年後の一七七八年に最初の英訳がトマス・ハートリー師の編集によりなされて出版され、それ以来、多くの英語版やまた他言語による訳が発行されてきました。

わが国では一九一〇年、英訳からの重訳が鈴木大拙によりなされ、この書によりスヴェーデンボリが広く日本に紹介されました。以来、いくつかの版が発行されています。中でも一九六二年発行の柳瀬芳意による訳書は現在までも長く版を重ねています。

その柳瀬訳も約五十年を経ました。その間もスヴェーデンボリについてのさまざまな研究は進んでおり、中でもラテン語辞書編者であり、古代文字の解説にも成功したジョン・チャドウィック博士によるスヴェーデンボリの語彙に関する業績は多大了。そのジョン・チャドウィックの語彙を全面的に取り入れ、ここで新たに『天界と地獄』をラテン原典から訳しました。訳出する上では、直訳に近いものにするだけでなく、何よりも著者の論理に沿った「忠実な訳」を心がけました。さらに新訳語だけでなく文体や読みやすさなども工夫してみました。

この新訳がスヴェーデンボリを深く学ぶ上で、その役に立ち、また「天界と地獄」を知ること、人生そのものをとらえ直すきっかけとなるなら、訳者にこれにまさる喜びはありません。

一八一〇年、スヴェーデンボリの著作を出版し、広めるための最初の組織「スヴェーデンボリ協会」がロンドンで発足しました。今年がその二百周年にあたります。前述のように、翻訳書を通して日本にスヴェーデンボリが紹介されたのがちょうど百年前であり、これは百周年を記念する事業の一つでもありました。この節目の時を祝して、この新訳が出版されたことに、またその出版のために新組織がつけられたことに、そして何よりも主の恵みに感謝いたします。

二〇一〇年九月

鈴木泰之